
大陸奇譚

和泉ナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大陸奇譚

【Nコード】

N3505Z

【作者名】

和泉ナギ

【あらすじ】

大陸を旅する3人の兄弟。
神殿に持ち込まれる「魔物」の被害を、力を合わせて解決して行く。
・・・のかな？

兄弟「力」を合わせて今日も旅は続く。

セイレンの唄 1

これは、広大な大陸を中心に繰り広げられる
冒険と戦いの物語である。

……のかな？

その昔、『女神リユミエール』がこの大陸を創り、すべての生きとし生けるものが争いもなく暮らしていた時代があった。

しかし、その平和も一人の神の『欲望』のために崩れ去った。

欲望と略奪、殺戮に狂ったその男は『魔王』と呼ばれ、『魔物』といった残酷な生き物を生みだし、大陸全土を恐怖のどん底につき落としていった。

だが、そんな狂気も終わりを告げる事となる。

『魔王』に立ち向かったのは、女神の三人の息子達だった。

三人は力を併せ、長き戦いの末、『魔王』を封じた。

自分達の指導者でもある『魔王』を封じられ、魔物たちは大陸中に散り、闇に身を潜め、ほとんどは世に害することはなくなった。

ほんの一握りの高等魔以外は……。

大陸で東に面した一番大きな港町、セルヴィール。

気のいい人々が暮らす、粹な港町。

この日、丘に面した町一番の教会では、朝も早くからミサが執り行われた。そして、教会は町始まって以来の人で溢れ返った。

「ねえねえ、ずいぶんお若かったわよね」

教会から出て来た若い娘が、隣の娘に声をかけた。

「ホント、すてきだったわあ。でも、明日までしかおいでにならね

ないのでしょう?」

頬を染め、ため息混じりに言った。

普段この町は、大きい割に特別信仰の厚いものが多いわけではなかったのだが……、いや、人が多い方が逆に不信者が多いのかもしれない。

この日は、大陸一の神殿から来た若い坊さんを一目見ようと集まった人々で、教会設立以来の一番の大入りだったのではないだろうか?

まあ、どこの教会でも、坊さんのやることは変わらないのだが、これが若くて綺麗一（坊さんだから男なんだが……）だと噂を聞けば、ちよつとは覗いて見ようかなんてのはどこにでもある人の心情。噂の真偽は?

と、聞かれれば、ミサを済ませた人々の反応を見れば一目瞭然だった。

名残惜しそうに後ろを振り返りながら家路につく人々が多く目につく。

その人達をすり抜けるように、教会へ駆けていく一人の少年がいた。

少年は教会の戸を勢いよく開け、そのまま中へ入っていった。

「もう終わってしまいましたよ。どこまで行ってたんですか?」
「ア
ヴィ」

祭壇の前で後始末をしていた僧衣姿の青年が、やさしく問いかけた。

まるで光を集めたような長い黄金色の髪と、春の日差しに透ける木々の葉のような柔らかいグリーン色の瞳を持つ青年を、僧衣を着て聖書を片手にしていなければ、坊さんだなんてとても思えなかった。こんな坊さんが勧誘して歩いてるんなら、若い娘さんが沢山信者になっってくれるだろう。

「ゴメンナサイ、兄さん。オラージユ追っかけてたら遅くなっちゃった」

一所懸命走ってきた割には、どこかおっとりとした物言いの子である。

ちよつとねこつ毛の金茶の髪を掻きながら、大きな瞳をくりくりさせる。

頭を掻く両手にはめているのは、肘も隠れるくらいの手袋。しかも、手のひらの部分は動物の顔をしていて、人形劇の人形の様に口をぱくぱくさせている。ちなみに犬……らしい……？

これといって手袋をするほど寒い季節ではないのだが、本人はいたく気に入っているようなので、いいんだろうか？

「オラージユは？」

青年は、小さな弟と視線を合わすようにしやがみ込んで聞いた。

「町で見失ったの。きつとどこかで昼寝してるよ」

町の方を指差しているのだから、両手にはめている手袋の犬の顔が、指の替りに町を向いている。

「……お腹が空けば帰ってくるでしょうけど、この町の滞在は明日まで。仕事の打ち合わせもありますから、捜しにいけますか」

ため息をつきながら、椅子に掛けてあったマントを羽織り、弟を伴い教会を出た。

アヴィは無邪気に手袋の人形で遊びながら、相も変わらずのんびりした表情でチヨコチヨコと後をついて行った。

セイレンの唄 2

町に出ると、いつものように賑わってはいたが、どこか普段と違っていた。どこかと聞かれても、あまり変化が見られないような気がするが、違っていているとしたら港町の「市」につきものの「魚」が少ない事と、波止場に「船」がない事だろう。

大陸一の港町のはずだが、港としての活気がなかった。

小さな漁船はいくつかあるのだが、大きな船は一隻もなく、貿易船も多く入港し賑わうはずだが、一向に船が入る気配もないのである。

いたって波は穏やかで、海はまるで休日のようなようだ。

二人は散歩でもするかのようになり、のんびりと砂浜を歩きながら浜辺を見渡した。

「あゝ、難破船だあ」

見る影もないようにバラバラで砂浜に打ち上げられている大量の残骸を見つけ、アヴィは楽しそうに駆け出した。

青年はその後ろを足元に注意しながら、ゆっくりとついて行った。「残骸で怪我をしないように」

残骸の周りを宝の山でも見るように駆け回るアヴィに声をかけておいて、自分は一番大きな残骸へと変り果てた船へ近づき、中を覗き込んだ。

中も外と同じくらい、悲惨な状況だった。

真つ二つになった船体内からは水平線が見事に望める。床も歩くことができないほど傷んで、中に置いてあったであろう調度類も誰も手をつけていないのか、見事に四散したままだ。

「すごいですね。これで生き残った人がいるんですから」

この町に着いたとき、ある程度話を聞いてはいたが、実際目の当たりにして感嘆の声を上げてしまう。ここ数日、この港界隈で船の事故が相次ぎ、死人や怪我人が続出しているのだという。

「やっぱり神様っっているんだね〜」
いつの間にか横に立って一緒に覗き込んでいるアヴィが感心したように言う。

手袋をはめた手を合わせて祈りのポーズをとっている。

「でも、亡くなった人もいますから『運』だと思えますけどねえ」
神に仕えるものが、と思うような言葉をぼそつとつぶやいた。

信心深い信者や教会関係者が聞いたら、怒り肩で食って掛かるだろう。

それよりも、彼は本当に僧侶なのか？

「ふ〜ん。そっかあ」

解っているようで実は解っていないのんきな弟を笑いながら、再び町のほうへ歩き出した。

波はやさしく、そして力強く打ち寄せていた。

町はいたって賑やかである。

人々の往来も少ないほどではない。

しかし、港側は静まりかえっていた。

波は穏やかである。なのに、こんなに穏やかな日に船は一隻も出していない。

堤防で釣糸をたれ、幾人かが小さな魚を釣っているだけだ。

そこへ町の子供達が数人、笑い声を上げて駆けてきた。どうやら犬を追ってきたようなのだが……。

「バカヤロウ！その辺の犬っころと一緒にするんじゃねえ！！」

……犬が怒鳴り声を上げながら駆け抜けて行った。

さすがに釣り人も目を剥いて驚き、子供達から逃げる犬を見た。

外見は普通の小型犬である。

大陸で最もピュラーな種類で、庶民から貴族にまで好まれ、飼われているタイプだ。ふかふかの毛並みに大きな耳と尻尾が特徴だが、この犬はシルバーグレイの毛並みに金色の瞳が印象的だ。外見

の愛らしさと、しゃべる珍しさに、子供達は畏怖よりも好奇心を抱いて追いかけていた。

「あー、オラージュみつけえー」

その様子を浜辺から見つけたアヴィが、真正面に駆けてくる犬に抱きつこうとした。

「誰のせいでこんな目にあってると思ってるんだあつ?!」

犬はアヴィの抱きつきをかわし、すれちがい様に後ろ回しげりをアヴィの後頭部に決め込んだ。

アヴィは見事前のめりに転び、鞠のように数メートル先まで転がった。

犬の見事な技(?)に、追っていた子供達や釣り人が思わず拍手してしまうほど見事だった。

「見せモンじゃねえっ!」

犬は毛を逆立てて、観客を一喝した。

「ほんとに……」

「!」

頭上からため息混じりの声。

反射的に逃げようとしたが、首の後ろをつかまれ身体が宙に浮く。「まったく、弟にけりを入れるなんて、『お兄さん』のすることですか、オラージュ?」

「パセつ?!」

自分を拘束した相手に、少々青ざめる。(まあ、犬が青ざめたって毛がじゃましてわかんないけど)アヴィとともにやってきた青年だ。

「ちょっと待て。……犬が兄弟?」

「僕が悪いんだよ」

アヴィがゆっくりと起き上がり、頭や身体の砂を落としながらにこやかに言った。

邪気のない天使の笑顔とはこの事か……。この場合ちょっとは怒っても罰は当たらんぞ。

「もっと可愛いのにすればよかつたんだよねえ？」

「違うわい！」

論点のずれたアヴィの言葉に犬……、オラージユは力強く否定した。

「こんどは蛙にしてやんなさい」

その横からにこやかに口をはさむ。それがなぜかとてつもなく恐怖に感じる。

しかし、どうすれば犬が蛙に……？

「僕は大陸リスがいいなあ。オラージユは何がいい？」

「わあああああああああ？！」

パセの手から、青ざめて（毛だらけで解らなくて……）慌てふためくオラージユの身柄を受取り、ふかふかの毛に頬をすり寄せながら、間の抜けたようにアヴィは聞いた。

「ばかやろおおおおおおおおおおおつ！！！」

すっかり自分の意思を無視されている彼（？）は、すり寄るアヴィの顔を後ろ足で押し離しながら叫んだが、波の音に空しくもかき消された。

セイレンの唄 3

三人（二人と一匹？）は、ひとまず教会に戻り、客の来訪を待った。

この町に来た真の目的は教会での仕事ではなく、依頼主の仕事を受けるためであった。

ミサはついで。

しかし、その依頼とは？

港より戻って程なく、客は来た。

「わざわざのお越し、まことに痛み入ります」

初老の男は、従えて来た部下と数名の町の有力者とともに、自分の子供よりも若い青年に深々と頭を下げた。

「いえいえ、これが私達の仕事ですから」

向かい合って座ったパセは、にこやかに言った。

幾分か緊張がほぐれたのか、座り直した男達はひと呼吸置いて話始めた。

「もうご覧になったかとは思いますが、いろいろ手は尽くしたものの、我々の手に負えるものではございません。人づてに神殿の噂を聞きました、もう頼れるのはパセ様、あなた様しかいらっしやらないのです。どうか、お力添えを」

男はさらに頭を下げた。

どうやらあの浜辺の残骸についていつているらしい。

「どうか頭をお上げください。これは私達の『仕事』です。ご心配なく、『仕事』は今夜一晩で終わらせます」

若い僧侶は涼しげな顔で言った。

男達は喜びと驚きがちや混ぜになった顔を向けた。町の者が長い間どうにもならなかったことを一晩で片付けるとは。

「何せ、弟達を抑えておくのが一苦勞なので、一定の場所で長期労働ができないんですよ」

コロコロと笑いながら、横でジャレ合う（アヴィが一方的に絡んでいるが）犬と幼い弟を見た。

大きな町の一大事と、一人の子供のお守のどちらが大変なんだ？という顔の男達を無視してパセは話を続けた。

「おそらく、船を襲った犯人は、海に潜んでいた妖獣でしょう。遙か昔に封じられたといわれていますが、何かの拍子に目覚めたのか……」

「そついや、事件の起こる何日か前にでっかい地震があつたな」

パセの言葉に、男の一人が思い出したように言った。顔を見合わせ頷きあう。

「地震ですか……」

少し考えた風だったが、すぐにもとの笑顔に戻った。

「まあ、力だけの相手のようですから、この愚弟一人で十分でしょう」

そう言つて犬を指した。

「ああっ?!オレ一人にやらせようつてのなあ!」

犬がしゃべつた事と、犬一匹に任せようと軽く笑顔で言うパセに、男達は顎が外れんばかりに大口を開け、声もなくただ驚いていた。

「わ〜い、がんばつてねえ……」

ガッツ!

オラージュはのんびりと拍手して他人事のように応援する『弟』を殴つて黙らせた。

「い、犬、ですか?」

一人の男が、やつと言葉を発した。

不安の色を隠さず、あたり前の反応を示した。ごもつともである。「だあーれが犬だつっ!あんまり馬鹿にすつと、こんな町ぶつつぶ……うぐうつっつ!?!」

パセは悪態をつくオラージュの口に、そばの果物を丸ごとぶち込んで黙らせた。

見た目と違つて、意外にやることが荒っぽい。

「大丈夫です。万が一の場合、後始末は責任をもって私が……」
鋭い目を向ける犬に押されぎみの客に、ひと呼吸置いて言葉を付け加えた。

「でも、『万が一』があつたら、女神リユミエールに笑いとばされますねえ？」

笑顔で犬に向かって言う若い僧の言葉に、男達は一瞬背筋に冷たいものを感じた。

陰になって見えなかったが、パセの視線の先にいた犬が凍り付いたように一瞬動きを止めていたことに誰も気付かなかった。

昼間と変わらぬ波の静けさ。

天上には雲一つなく、美しい月がいつものように三つ昇り、下界を照らしている。

この世界では、『銀の月』と『蒼の月』、そして『金の月』の三つが、各々南、東、西から昇る。太古の時代より大陸では神聖なものの一つとして、太陽とともに崇められてきた。

今夜は特に一番高く昇った『金の月』が美しい。

三か月周期で月の軌道が入れ替わるのだが、『金の月』は昔から妖獣の『気』を高め、誘うと言い伝えられているためか、別名『獣王の瞳』とも呼ばれている。

かつて、『魔王』を封印した三兄弟の一人が金色の瞳をしていたため、王を封じられた妖獣達が悔しくて暴れているんだなどと、言うことを聞かない子に寝物語りに聞かせる親も少なくないらしいが、実際のところ『金の月』が一番高く昇る時、妖獣の活動が活発になるのは事実らしい。

妖獣といつても大陸各地にいろいろな『種』があるので、皆一概にそうとは言えないのだが、一番危険なのは無差別に殺し食らうもの。逆に温厚で人に混じって暮らすものもある。しかしそれも一握

りで、ほとんどのものが太古から今だ恐れられているのである。

大きさも数十メートルからねずみ程度のものまで、小さいからといって安心できないのが妖獣の恐ろしいところである。

ある程度ならば退治も可能であるが、今回のように手に負えず、廃虚と化した街や村も少なくはない。

まして、『知能』を持ったものが相手ならば尚のこと、立ち向かえるのはかなりの力を持った戦士か術者、大陸一の神殿の僧達以外にはない。

それでもこの『金の月』の夜には、神殿の僧も大陸の腕自慢達でさえも外に出るのを避ける。報奨金に目が眩み請け負う者もいたが、それは『自殺行為』であった。

『金の月』が天上高く姿を現す時、月明りの下身をさらす者、再び現世に戻れるものなし……と。

そんな晩は、弱き者は息を潜め、住処に身を隠し、ひたすら夜が明けるのを待つのだ。

そして今夜は虫でさえ息を潜める『金の月』の晩。

そんな虫も恐れる晩に『彼』は浜辺に立っていた。

じつと、穏やかな波の向こうに広がる水平線を、やさしくそよぐ風と月の光りを浴びて立っていた。

まるで誰かを待つように。

身動き一つせず、ほっそりとした身体つきではあるが、水平線を見通すような意思の強さを感じさせる瞳で海を見つめていた。

その瞳は、……黄金色。

セイレンの唄 4

不意に風が止んだ。

「……来たか」

そうつぶやいた彼の口元はほころんでいた。

次の瞬間、水平線の向こうから波が押し寄せてきた。

いや、何かが水面下から姿を現そうとしているのだ。

水が数十メートルの高さまで盛り上がり、月の光りを浴びて全容を現した。

それは巨大な海蛇。

中型の船ならひと噛みでまっぴらつにしてしまいそうな口には鋭い歯がびっしりと並び、どうやって周りを把握するのか目らしきものは見当たらない。月の光と水を弾く表面には所々海藻が付いているものの、は虫類と同じ皮膚は岩礁を砕くほどの硬質さを持っているようで、ものともせずに進んでくる。

耳を抑えたくなくなるような啼き声を上げたかと思うと、ものすごい勢いで海を割る様に陸地へと迫ってきた。少年の立つ方へ。

それと同時に少年は走り出した。

走りにくいはずの砂浜を、苦にするふうなく軽快な走りで駆け抜け、海へ迫り出す崖の上へと一気に駆け上がった。そして、なんとそのまま海へと勢いを殺す事無く飛び出した。

はつきり言って、助走をつけて崖から飛び降りたのと同じである。止まり切れず、飛び降りてしまった「マヌケ」のようでもあるが、それは少年の顔から間違いであることがわかる。

普通の人間よりかなりの距離を跳んだ少年の下には、あの海蛇がいた。

タイミングは頭の上。

「今夜でおさらばだ！」

そう口にした少年の身体は、かなりのスピードで降下し始めた。

「弱肉強食は世の常。強いものが生きるために弱いものを狩り、食らう。しかし、それに『欲』が加わり、意味もなく殺し、ただ奪うのであれば……僕らは見過ごすわけにはいかない」

岩に当たって弾けた水飛沫が、月の光りできらきらと宝石のように輝いて彼の周りに散る。今宵の月のように輝く髪と、海よりも深い蒼の二つの宝石をもって現われた青年に、女はしばし心を奪われた。

そして、こう思ったのである。自分のコレクションに……、と。

女は即、行動に出た。

「その弱い人間如きが、この私に説教かい？ちよつと腕が立つといつて刃向かってくる馬鹿な人間が何匹かいたが、身の程知らずとお前もその身をもって知るがいいよ！」

勢いよく跳ね上がった女の身体は、まっすぐ青年に向かって行った。

女の半身は長い『尾』となっていた。蛇女か？！

銀色の鱗は鋼のごとく強靱で、岩をも砕き、大きく開いた口は鋭い歯をむき出しにして相手の喉を正確に狙った。

「兄さん！」

声と一緒にかなり大きめの石が跳んできて、不意に見上げた女の口に見事に入った。

すっぽり入ってしまった石のために声も出せず、目を向き、おまけに石の勢いも手伝って、そのまま情けない格好で海に倒れ落ちた。

「アヴィ、オラージユは？」

崖の上から顔を覗かせた少年に声をかけた。

「貧血う。浜で倒れてたあ」

こんなときでもものんびり笑顔で答えるあたり、根性が座っているのか、はたまた単に鈍感なのか……。

アヴィの懐から顔を出して伸びているリスの手を取り、ぬいぐるみの顔が付いた手袋と一緒に手を振る。

「人一倍体力持て余してるくせに、持久力ないんだから……」

パセはその姿を見てため息を付きながら嘆いた。

……あれ？ リス？！

「おのれ〜」

間の抜けた会話をしている間に、蛇女が髪を振り乱し、再び海面に顔を出した。物凄い形相で海面から現われるシーンは、毎夜夢に出そうだ。

化粧を落としたおばさんが、急に暗がりでも振り向いたのと同じくらい、怖い。

「アヴィ」

そんな状況でも落ち着き払ったパセは、首にかけていたクルスを上にいるアヴィ目がけて放り投げた。

それをアヴィが手袋を外した右手でつかんだ。が、クルスはその手からこぼれ落ち、そのまま下へと落下する。

その下には、パセに襲いかかるうとする蛇女が。

パセは岩を蹴り、そのまま壁際へと下がった。

ドシュツッ！

上から落ちてきたクルス、いや、一本の剣が蛇女の頭を貫き、更に勢いでそのまま岩に突き立った。まるでまな板の上で捌かれるうなぎの様に縫い付けられた。

「ぎいいいいやああああああああああっつつつつつつつ？
」

耳を裂くような悲鳴を上げ、岩に縫いつけられた状態でもがき苦しむ、身体はなりふり構わず暴れた。

海面を叩けば数メートルの水柱が上がり、岩に当たれば粉々に砕け飛んだ。

「わわっ、こりゃ参ったね」

ことごとく足場を砕かれて、パセはひよひよいと器用に後退しながらアヴィ達のほうへ向かった。

ため息つきながら言うパセに、でかい態度で反抗する。

「いいじゃんか、片付けたんだから！それよりも、何で大陸リスなんだっ？！」

後はアヴィへの質問だった。

その問いに、当り前のように答える。

「可愛いし、軽いもん。オラージユは犬がよかった？『元』のままだと僕、引きずってもこれないもん」

「じゃあ、もう『元』に戻せよ」

「え、せつかく大陸リスにしたのにい？！」

目を大きく見開いて不満そうに叫んだ。

「お前！結局自分の趣味だろーがっ？！」

毛を逆立てて怒ったが、手に乗るサイズで愛らしい姿に効果は半減だった。

「ちがうよー、大陸リスが可愛いからだよお」

「だからそれがお前の趣味だって言ってるんだよ！オレは『元の姿』に戻りたいの！」

「そしたら僕、オラージユ運べないよお。ここ入らないもん」

ちよつとむくれて懐を引っぱって見せる。

ちなみに大陸リスとは、お腹にあるポケットに子供を入れて育てる、小型の有袋類である。大陸に広く分布、生息する。

「~~~~~！！！」

会話のかみ合わない大ボケな弟に、オラージユの血管は切れかけた。間抜けな兄弟喧嘩を黙って聞きながしていたパセは、クルスを首にかけ直して海を見て言った。

「ほら、もう夜が明けますよ。馬鹿な漫才は後にして朝のお務めです。教会へ帰りますよ」

「はあーい！」

アヴィは元気に返事をして後を追った。

反対にオラージユはぐったりしたように、反発していたアヴィの懐に身を沈めた。

「しばらくこのままでいてやる。寝るから起こすんじゃないぞ」

「わーい！」

喜ぶアヴィに、パセが笑顔で話しかけた。

「アヴィ、今日はこのままミサに参加しなさいね」

「げっ?!」

懐から抜け出そうとしたオラージュを押し込んで、アヴィは教会へとスキップした。

水平線からはゆっくりと朝日が顔を出し、新しい一日の始まりを祝福するかのように、光りを振りまき始めた。

エンブーサの囁き 1

「大僧正様、今、東の街に行かれたパセ様からご連絡がございました」

神聖な神殿の回廊を早足でやって来た歳若い僧侶が、笑顔で神殿の奥に位置する大僧正の部屋を訪ねる。

朝霞の立ち込める山々の間からのぞき出した太陽の光が、神殿の部屋にも差し込みはじめた頃、一人の僧侶が、今昇ったばかりの太陽に祈りを捧げる老体に声をかけた。

「務めを無事済ませ、次の土地へ参るとの事でございます」

「そうか」

深く息を吐き、次第に明るさを増す太陽に目を細めながら、独り言のように言った。

「あれの事だ、心配する必要はないのかも知れぬが、……今の私では、このように祈る事しかできぬ」

老いた身体をゆっくりとそばの椅子に任せた。

「大僧正様、パセ様は大僧正様のお身体を思つて自ら志願されたのです。そのお心に報いるためにもお早くお身体をお治しくださいませんと……」

齢を重ね、やや気落ちぎみになる大僧正をもり立てようと、言葉に力も入る。

「あの方は神殿でもあの若さで大僧正様に継ぐ力の持ち主、きっと皆の期待に答えてくださいます。それに、オラージュ殿やアヴィ様も一緒です」

僧の力説に大僧正は笑顔で頷いた。

「そうであつたな。パセの心遣いに甘えて、しばし休ませてもらう事にしよう」

僧が部屋を去り、独り静かに目を閉じていた大僧正が呟いた。

「もう10年か……。『女神リユミエール』よ、あなたの子供達を

「お護りください……」

胸の前で手をそつと組み、太陽へ向い静かに祈った。

「オラージュ、大丈夫う？」

容赦なく照りつける日射しの中、一本の大きな木の下で、少年は大きな葉をうちわ代わりに、ぐったりとするリスに風を送りながらたずねた。

ちよつとねこつ毛の金茶の前髪を自分で仰ぐ風に揺らし、大きなグリーンの入った瞳を心配そうに瞬かせる。三つ又に別れた帽子をかぶり、ノースリーブのシャツにひじの隠れる長い手袋をしている。手袋は緑色の「蛇」……らしい。

暑さでのびたリス、オラージュの面倒を見ているのだ。

平原に近いこの辺では、太陽を遮るものが少ない。この木もやつと見つけた日陰に身をおける程のもので、辺りは一面草原と言ってもいい。

リスの身体のサイズには丁度良い、木の根元の穴で「大の字」で寝ていた。

「アヴィ……、パセはあゝ？」

「んかねっ、今、池らしいものが見えたから、飲めるか見て来るって」

おまけにこの暑さの中、手袋をはめっぱなしの少年、アヴィ。

まあ、本人はいたって涼しそうな顔をしているが。

「まだ気持ち悪い？」

「だいたいいい。……それより何か、音しねえか？」

「音？」

オラージュの言葉に扇ぐ手を休めて、耳をすます。

「……さあ？」

しばらくしてアヴィは首を傾げた。

「こん中にいるから、響いて聞こえるのかな？」

だるそうに、リス事、「オラージュ」は、のっそりと身体を起こした。

「後ろの方で、何か木を這ってるような……」

穴から顔をだし、後ろを覗こうとする。アヴィも一緒に回り込むようにして、木の後ろを見た。

「なにも……」

そう言いかけてアヴィは息を飲んだ。

覗き込んだアヴィの目の前に、大きなトカゲが顔を向けた。

緑色の舌がアヴィの顔を下から上へと舐め上げる。

「……っ、きゃああああああああつっつっつっつ？！！！！！」

「な、な、何だあ？！」

突然の悲鳴に、アヴィの背中で見えなかったオラージュは、その驚き様に慌てて穴に逃げ込んだ。

「やだ！やだ！！トカゲ嫌いいっっっっっ！！！！」

「トカゲえ？」

オラージュは再び顔を出し、呆れたように言った。

「おまえ、トカゲくらいで……」

そう言って再び穴から顔をのぞかせたオラージュは、ふと自分を見ているトカゲと目が合った。

体長はアヴィと同じくらいで、緑色の舌を忙しく出したり引つ込めたりしながら、じわじわと寄って来る。

このトカゲ、妖獣の中でも大人しい部類のはずだが、ふと、オラージュの頭をこれに関する嫌々記憶が過った。

非常に、ヤバい……。

「ちょおっと、待てえーっ！！オレは不味いぞおおおっ！！！！」

オラージュは猛ダツシユで穴から飛び出した。貧血を起こしている場合じゃあない。

この妖獣、人間は襲わないが大陸リスが好物ときている。

おまけに体格の割りに動きが滅茶苦茶速いときた。

「わああああああつ！アヴィ、なんとかしろおおつ！！！」
トカゲが苦手なわけではないが、如何せん、この姿では不利だ。
「やあああああつ！気持ち悪いよおおおつ！！！！！！！」

肝心のアヴィが反べそで木の周りを逃げ回る。

トカゲ類がまるでダメなのだ。じゃあ、蛇や蛙は良いのか？

「も、戻せ、オレを、元に戻せええええつ！アヴィっ！！！」

「ふええええええんっ！！！」

泣きながら、走りながらあたふたと手袋を外す。だが慌てるせいでうまく外れない。

その後をオラージュが死物狂いで追い掛ける。

「こら！落ち着けアヴィ、転ぶぞ？！」

言った矢先に木の根に足を引っ掛け、転んだ。追って来た妖獣が迫る。

転んだアヴィの周りをパニックに落ちかけたオラージュが、ぐるぐる頭を抱えて回る。

妖獣が迫って来ただけで、すでにアヴィはパニック状態。

「いっつやあああああつ！！！」

「っわあああああああああつ？！」

どぐあああああああああああんんっ！！！！

バギバギバギバギイイツ！！！！

ずどどどどどおおんんんっ！！！！！！

悲鳴と共に凄まじい音の連続と、大量の葉の洗礼を受けた。

それから少々間を置いて、二人の方にゆっくり足音が近付いて来た。

アヴィに覆いかぶさるようにして息を切らしているオラージユに、戻って来たパセが、しゃがみ込んで尋ねた。

「……水、飲むかい？」

横には無惨に倒された木と、その幹と大地にサンドされてしまったトカゲが……。

アヴィはただ泣きじゃくりながら、貧血で青ざめ、さらに息を切らして動けないオラージユの腕にしがみついていた。

エンブーサの囁き 2

日はすでに山の頂上に差し掛かり、一日を終えようとしていた。

予定より遅れて草原を越え、次の目的地に行く為に越えなければならぬ川に差し掛かった時には、日は山の頭から僅かに顔をのぞかせているだけだった。

「たしか、川沿いに村があるはずですね。今日はこの辺に一晩泊めてもらいましょう」

そう言っつてパセは辺りを見回した。

すると、川岸の渡し場で後片付けをしている老人をみつけ、声をかけた。

アヴィは大きな葉を日傘代わりに、クルクル器用に回しながら後をついて行つた。日が沈みかけてもまだ気温は高い。

そんな中、アヴィの懐でオラージュは眠り続けていた。

パセが老人に宿を訪ねると、村はずれの一軒の家を紹介してくれた。人の良い未亡人が一人でやっている小さな宿があると言うのだ。礼を述べ、アヴィを伴つて教えられた方へと歩き出した。

その時だ、実に珍しい事が起こつたのは。

アヴィの懐で眠っていたはずのオラージュが、突然飛び起きたのだ。

「どうしたの？」

驚いたアヴィが歩みを止め、尋ねた。

珍しい出来事に、パセも覗き込む。

貧血症で、低血圧の彼が、自分からハッキリと目覚める事は『なに』に等しい。いや、一つだけ……。

まあ、これは後で話すとして、オラージュの全身の毛が逆立っていた。

本人（リス？）さえ驚き、辺りを見回している。

「なにか……悪寒が。……ここ、何処だ？」

場所を聞くあたり、今までよく眠っていた事が伺える。

「プランレー又川まで来たんだけど、予定より道草食ったからこの村に泊まるうと思っただけど……」「マズイ」かい？」

パセはオラージュに尋ねた。

「お前の方が専門だろう？オレのは『勘』。……でも、この『気』……」

「毛が逆立ってる……」

首元を撫でるアヴィの手に、オラージュは思わず気持ちよさそうに咽を鳴らしてしまった。我に返ったオラージュは小さな手でアヴィの顎にアツパーをくらわす。

緊迫感は何処に……。

「やめんかっ！！気持ちい……、じゃなくって！！うっとおしい！！！」

2人の漫才を無視するかのように、パセは言った。

「今晚泊れる所、ここしかないんだけど？」

困っている様で、（絶対）困っていない顔をしたパセは、村のはずれの一軒の家を指し示した。

しかし、殺風景な村だ。

民家は多くもなく少なくもなく。

日が落ちるとはいえ、あまり人に出会わないと言うか、それよりも若い人を見かけないのだ。過疎の村なのだろうか？

「何も、自分から檻に入んなくなつたって……」

オラージュが露骨にイヤな顔をする。

「そこまで解つて見過ごすなんて、神に仕えるものの言葉とは思えませんね」

「仕えてるのはお前だけだよ！」

ころころと笑いながら歩き出したパセの後を、黙って聞いていたアヴィは慌てて後を追って歩き出した。

オラージュはアヴィの懐に奥まで入って、宿についても顔をなかなか出さなかった。

パセ自身、僧侶と言う事もあってか、宿屋の女主人は大層な歓迎をしてくれた。

「近頃、あちらこちらで妖獣が暴れているとは聞いておりますが、幸いこのあたりはさしたる被害もなくすんでおります。これもひとえに神と、お仕えする神殿の方達のおかげと思っております」

女主人は手をあわせ祈った。

急な客に、女主人は何もないと言いながらも十分な料理を出してくれた。食事の最中は、アヴィがここへ来るまでの経緯をいつもの調子でしゃべった。

屈託のないアヴィのしゃべりに、まるで子供の冒険談を聞く母親のように、相槌をうちながら最後まで聞いてくれた。

「今夜はゆっくりお休みください。なにぶんここは田舎、静かな事だけがとりえのようなところですから」

笑って女主人は食事を終えた2人を部屋へと案内した。

「この辺りでは、妖獣の被害はないのですか？」

部屋へ歩きながらパセは女主人に尋ねた。

「これといった話はないのですが、近頃、村で子供達が亡くなるのが続きました……。朝起きてこないのも、様子を見に行ったら、何か恐ろしいものでも見たように苦しそうな顔をして死んでいたとか……。これも何かの妖獣の仕業なのでしょうかねえ？」

そう言って、女主人はアヴィを見た。

「皆まだ、これぐらいの年の子ばかりで……。子供達もだけど、残された親達も可哀想で……」

女主人はそう言って目頭を押さえた。

「……………」

部屋の前でパセが明日の出立時間を伝えると、女主人は挨拶をして自室へ去った。

部屋に入る早々、疲れもあってか、2人はベットに入り眠った。

夜半近くになると、雨がぱらついてきた。

雨は、夜の闇をさらに引立てるかのように降り、あたりを黒い闇へと誘う。

村には獣や家畜、虫の声さえなく、ただ雨の音が響くだけ。

まるで無人の村のように……。

そんな中、平和な寝息をたてる2人がいた。

パセとアヴィだ。

そのアヴィが、しばらくするとベッドの中で微かなうめき声をあげていた。

「ん、……うっ……。」

シーツを握りしめ、額には脂汗まで滲んでいる。どこか苦しいのか、それともイヤな夢でも見ているのか。普段の様子からは見る事の出来ない表情に、涙さえ浮かんでいる。

アヴィはこの10年、良く夢にうなされる。

どんな夢を見ているのかは、当人も起きれば忘れてしまうと云うので、未だ不明のままである。ただ、『2人の兄』がその姿に気がつき、優しく抱いてやるしかないのだった。

しかし、その日に限ってパセは寝息をたてたまま起き上がる様子もない。

雨の音にかき消されているとは言え、この様子に気付かないとは……？

その時、そのアヴィの傍らに立つ者がいた。

宿の女主人だった。

いつの間に部屋に入ったのか。女主人の部屋まで、アヴィの声が届いたのか？

いや、では何故パセは……？

「可哀想に、うなされて。よほど怖い夢を見ているんだね？」

そう言って、アヴィのベッドに腰を下ろし頭を撫でた。

「自分の最も恐れている事を、辛い事を……」
うつとりするような目で覗き込む女主人の口から、ひと雫の涎がこぼれ落ちた。

「今日はなんて良い日なんだい。こんな可愛い子供と、綺麗な坊さん……くつくつくつ。めつたにないご馳走だねえ」

パセも気付く気配がない。それどころか目覚める様子すら一向にない。

料理に薬でも盛られていたのだろうか？

こぼれ落ちる涎をなめ取る舌は、青く長く、不気味に輝く瞳はアヴィを捕らえて離さない。そして、ゆっくりとアヴィに手を伸ばさうとした。

その時、今まで降っていた雨が止み、雨雲がゆっくりときれ、月が顔をのぞかせた。

月の明かりがカーテン越しに差し込み、女の顔を映し出し、そして影をもつくり出す。

「?!」

アヴィに手をかける寸前、女は気付いた。月明かりが映し出した影が不自然である事を……。

「誰だい?!そこにいるのは?」

そう、今日この宿に泊まっているのは2人。アヴィはともかく、パセは相変わらず動く気配すらなくベッドで寝ていた。

では、自分の影といっしょに映し出されたもう一つの影は？

エンブーサの囁き 3

今までとは一転した形相で、押し殺した声には殺気が含まれていた。

普通の人間ならばそれだけで足がすくむか、気を失っているだろう。

「オレはずっといたけどね」

影の主は何ごともないように答えを返した。

女主人の殺気は相殺されていた。と言うよりも、逆に押し返されていた。

殺気でもなく、なにか圧倒されるような別の大きな力に。

女主人は無意識に後ろへ下がっていた。

窓からのぞく『黄金の月』の光りに照らされ、影の主はその姿を現した。女はなぜか平伏したい衝動にかられた。

身長割には華奢で、伸びた前髪の間からは金色の瞳がのぞく。

不適な笑みを浮かべ前髪を掻き揚げながら歩み寄ってくる。そしてアヴィのベットに腰をおろした。女とアヴィを隔てるように……。

「旨かったか？ この宿に泊まった人間は……」

その言葉に、一瞬身体が金縛りのように締め付けられる気がした。まるで見えない糸に絡まれたように、鋭く、そして冷たく……。

そんな中、やっと口から搾り出せた言葉は、彼女にとっても意外な問いだった。

「……お前は、人間か？」

意表をついた問いに、彼は不機嫌な顔になった。

「失礼なババアだな！ 人外なのはお前の方だろうが！ 人を化けもんみたい…… お前やパセと同類に扱われちゃあ、たまったもんじや……」

そこまで言いかけた時、後頭部に硬いものが投げ付けられた。

「がん！！」

「黙って聞いていれば、血の繋がった兄弟を化け物と一緒にするなんて。オラージュ、後でひどいですよ！」

ベッドの上に起き上がったパセが、後頭部の痛みでうずくまる彼を冷やかな目で睨んでいた。

「なっ？！ わ、私の『術』で、しばらく身体が動かないはずなのに……」

驚きを隠せない彼女に、パセはさらりと答えを返した。

「不浄なものはすぐ浄化してしまえるんですよ。とくに、貴女達の『毒気』とかはね」

「けっ。十分人外じゃん……」

「ごん！」

毒づいたオラージュの後頭部にまた置き物が飛んだ。

「い……ってえじゃねえかつ！！」

潤んだ目で後頭部を押さえながらパセに食って掛かる。

「あ、あんた達、何者だい？！」

まだ気圧されたままの女主人は、二人に向かって精一杯声を張り上げた。

「……何って、通りすがりの旅の僧侶ですが？」

パセはとぼけたような答えを返した。

「根性悪がプラスされるがな……」

「……オラージュ、君は『兄』をなんだと思ってるんだい？」

涙目のままオラージュはパセと睨み合った。

「おいおい、相手が違わないか？と、そんな緊迫（？）した中、ぐーすか寝てる奴もいるが。」

その言い合いをしている2人の隙をつくように、女主人はベッドの.avuiに襲い掛かった。阻止しようとしたオラージュの間をぬって、女主人は.avuiを奪い取った。鷹のような鉤爪で.avuiを抱き、背中から生やしたコウモリのような翼で部屋の中空に浮いていた。

「エンプーサ……」

その姿を見てパセは呟いた。

「せつかくの食事を邪魔しおつて……。悪夢にうなされている人間の血を啜るのが、私の一番のごちそう……。それを邪魔しおつて！」
「だからって、誰が大人しく餌になるかってんだ!!!」
言い終わる前にオラージュは踏み込んでいた。

天井近くまで軽々と飛び上がり、振りかざした拳は容赦なく彼女の頬を殴りつけた。その勢いのまま、床に叩き付けられ大穴を開けた。

抱いていたアヴィは手からすり抜け、ベッドの上にはいたパセの腕に受け止められた。

そんな事があっても、エンプーサの『術』のせいなのか、それとも何ごとにも動じないアヴィの性質なのか一向に起きる気配はなかった。

「う、うう……」

よろよると起き上がる彼女に、『手加減』と言つ事を知らないのか、オラージュは表情もかえる事なく近寄つた。

「ま、まさか……お前達……でも、そんなはずは……」

驚愕の表情で、彼女は必死にオラージュの瞳から逃れようと、身体を引きずりながら窓際へと移動した。

「オレ達って、有名人？」

指の関節を鳴らしながら、陽気にパセに尋ねる。

視線は外さない。

見下すように相手を射る視線は、金色の矢。おどけた表情をしてはいるが、オラージュから漂う鬼気に彼女は、自分が心底震え上がっているのがわかった。

「容赦ない君の悪名が、妖魔達の間でうわさにでもなってるんじゃないですか？」

そんな緊迫した空気の中まだ根に持っているのか、うなされながら寝ているアヴィの頭を撫でながら、さらりと答えた。

「……ぜってー、虫も殺さないような笑顔で切り捨てる、妖魔以上の性悪金髪坊主のうわさだっ!!」

オラージュが負けじと言い返す。

「……ふふふふふ」

お互い引きつった笑いを浮かべながら、一触即発の空気が二人の間に流れる。

そんな事で口げんかしている場合ではないと思うのだが……？

その隙を逃すはずもなく、彼女、エンプーサは黒い翼を広げ、窓をやぶり外へと飛び出した。

「！」

壊れた窓から、生暖かい風が吹き込む。

「……つつのお！」

とつさにオラージュは反応していた。

即座に壊れた窓から飛び出し、散った窓枠の破片を掴み、彼女目掛けて投げ付けた。それは迷う事なく、彼女の翼を射抜いた。

『ぎゃああつ?!』

地面に叩き付けるように落ちた彼女は、打ち付けた身体と翼に突き刺さったままの木枠にのたうち回った。

じゃりっ

すぐ側で、土を踏みしめる音。

「さっつて、どうすっかな？」

抗う事も許さない金の瞳が、彼女を見下ろしてそう告げる。

この瞳から逃れる事は、やはり不可能だったのか……。痛みよりも、『恐怖』が勝っていた。その時、

「封印しましょう」

宿屋の方からゆっくりと歩いて来たパセが言った。

「ああっ?!」

不服そうなオラージュにパセは続けた。

「アヴィは眠ったままで、剣は使えません。まして、君に任せたら力技でバラバラ……ってとこでしょう？」

恐ろしい台詞をこともなげに言っつて、彼はオラージュの前に出た。見えない恐怖から這っつても逃げようとする彼女を前に、静かに

告げた。

「貴女には今までの酬いとして、一生この土地を護っていただきませよ……」

そして経文でもなく、歌のような聞いた事もない言葉を口ずさみはじめた。この国でも、ましてやこの大陸中でさえ聞いた事がないであろう、その『言葉』は、徐々に彼女の身体を見えない糸で縛るかのように、呪縛しはじめていった。

「?!っ……くっ!!」

口から悲鳴すらあげる事もできず、苦悶の表情で目の前の男を見る。

彼女の表情とは反対に、まるで子守唄でも歌っているかのような穏やかな彼の周りには、淡く優しい光が包み込んでいた。その光が彼女へ向かってじわじわと伸びてくる。

エンプーサは無意識に身をよじった。動けるはずもないのに……。

(『あれ』に捕まったら……!)

『唱い』続けるパセから放たれた光は、彼女を包み込むと一瞬強い光を放ち、何ごともしなかつたように消え失せた。パセの『唄』も……。

そしてそこには一つのエメラルド色に光る握りこぶし大の石が落ちていた。

オラージュは石を拾い上げた。

「壊すなよ」

パセはそう一言声をかけた。

「しねーよ!」

二人はゆっくり宿屋の方へ歩き出した。月明かりは優しく二人に降り注いでいた。

「うわああああああん!!」

「おわっ?!」

部屋の扉を開けると、いきなり夢から醒めたアヴィが泣きながら飛びついて来た。

「トカゲがっ！ トカゲが襲ってくるよおおおおっ！！」

ただ泣きわめくだけのアヴィに、経緯を説明しようが泣き止む気配は一向になかった。

「パ~~~~~セ~~~~~エ」

困り果てたオラージュが、助け舟を頼もつと横を見ると、彼はさつさとベットに入ろうとしていた。

「ちよーつと待てい！ 人に押し付けて寝るつもりかっ？！」

怒りをあらわにする彼に、パセは背を向けて答え返した。

「そうなったアヴィを鎮められるのは君だけだろう？ 後はよろしく……」

そう言っつてさつさと布団をかぶってしまった。

オラージュは真っ赤になりながら言い返す事もできず、少しの間パセへの怒りと、アヴィの状況におたおたしていたが、いきなり意を決したように泣き続けるアヴィを抱えて外へ飛び出した。

「……別に、ここでもいいのに」

ベッドの中でパセはそうつぶやき、笑いを堪えていた。

しばらくして外から聞こえていたアヴィの泣き声は、いつの間にか止んでいた。

そして代わりに、一晩中澄んだ歌声が村中に微かに流れていた。

まるで母親の腕の中で子守唄を聞かされ眠るような、優しい歌声が……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3505z/>

大陸奇譚

2012年1月6日23時51分発行